

第 24 回
日本看護科学学会学術集会
講演集

東京

2004 年 12 月
第 24 回日本看護科学学会学術集会
会長 高崎 絹子

看護系大学教員の質的研究の知識と実践に関する意識調査(1)

—質的研究の信頼性と妥当性に関する意識—

○高木 廣文 (たかぎ ひろふみ)、西山 悦子

新潟大学 医学部 保健学科

【目的】看護研究では質的研究が量的研究に劣らず重要であり、質的研究の質や科学性に関しての検討も必要であろう。ここでは、科学的根拠として質的研究の信頼性と妥当性に関する看護研究者の意識についての調査結果を報告する。

【対象と方法】日本看護系大学協議会会員名簿(平成15年度)に記載の3,745名を調査対象とした。平成15年12月8日～20日に、基本属性と質的研究の方法の知識や実践経験等に関する91項目からなる質問紙による郵送調査を実施した。平成16年1月8日～23日には礼状兼催促状を発送し、2月末日までの回収数は1,118例であった。所属機関からの通知により退職等が判明した不適格例が12例あり、最終的な回収率は29.9%であった。

回答者は男145名(平均年齢49.1歳)、女961名(同41.7歳)、不明12名であった。996名(89.1%)が看護研究を実践しており、さらに質的研究の専門的知識の有無に関しては、肯定的回答が695名(62.2%)であった。肯定的回答者のみに質的研究に関する詳細な質問項目への回答を依頼した。

【倫理的配慮】調査は個人への郵送法であるため、回答は自由意思によって行われている。無記名式かつ調査項目の組み合わせでも個人識別ができないように配慮した。

【結果】「質的研究の信頼性は高いと思いますか」に対して、はい22.5%、いいえ6.3%であった。妥当性に関しては、はい22.6%、いいえ5.3%であった。「質的研究の信頼性を高める方法を知っていますか」に対して肯定的回答81.7%、いいえ18.3%であった。妥当性に関しては肯定的回答78.7%、いいえ21.3%であった。「トライアングレーションの方法を知っていますか」に対して、肯定的回答47.5%、いいえ52.5%であった。

質的研究の信頼性を高める方法の実践は、はい50.7%、妥当性を高める方法の実践は、はい47.3%であった。トライアングレーションの方法の実践は、はい13.7%であった。

信頼性を高めるような質的研究の実践群では、質的研究は信頼性が高いと30.8%が回答し、非実践群での14.1%と大差があった。妥当性に関しては、実践群で28.9%、非実践群で16.7%が、妥当性が高いと回答した。トライアングレーションの実践—非実践群間の比較でも、信頼性と妥当性について同様の結果であった。

【考察】質的研究の信頼性と妥当性への否定的な意見は極めて少なく、2割強が質的研究の信頼性や妥当性を確信していた。約半数の研究者が実際に信頼性や妥当性を高めるような質的研究を実践しており、実践を通して信頼性や妥当性をより高く評価するようになるものと考えられた。なお信頼性と妥当性という用語の問題点、質的研究に対する質問形式についての問題点等を回答者から指摘された。調査にご協力頂いた看護系大学教員の方々に深謝致します。(本研究の一部は、平成15年度・16年度科学研究費補助金(基盤研究B(2)課題番号15390660)による)

看護系大学教員の質的研究の知識と実践に関する意識調査(2)

—質的研究の講義受講経験と質的研究方法の関係—

○西山 悦子 (にしやま えつこ)、高木 廣文

新潟大学 医学部 保健学科

【目的】質的研究の科学性に対する看護系大学教員の意識を調べるために全国調査を実施した。ここでは、質的研究についての課程別受講経験の有無と質的研究方法の知識と実践に関する看護研究者の意識についての調査結果を報告する。

【対象と方法】日本看護系大学協議会会員名簿(平成15年度)に記載の3,745名を調査対象とした。平成15年12月8日～20日に、基本属性と質的研究の方法の知識や実践経験等に関する91項目からなる質問紙による郵送調査を実施した。平成16年1月8日～23日には礼状兼催促状を発送し、2月末日までの回収数は1,118例であった。所属機関からの通知により退職等が判明した不適格例が12例あり、最終的な回収率は29.9%であった。

回答者は男145名(平均年齢49.1歳)、女961名(同41.7歳)、不明12名であった。996名(89.1%)が看護研究を実践しており、さらに質的研究の専門的知識の有無に関しては、肯定的回答が695名(62.2%)であった。肯定的回答者のみに質的研究に関する詳細な質問項目への回答を依頼した。

【倫理的配慮】調査は個人への郵送法であるため、回答は自由意思によって行われている。無記名式かつ調査項目の組み合わせでも個人識別ができないように配慮した。

【結果と考察】学部、修士課程、博士課程で質的研究の講義を受講した経験がある者のうち、質的研究方法の各々の項目についての、知識(知っている/少し知っている)と実践経験の結果は以下のとおりである。

サンプリング法の知識が最も高かった項目は、学部、修士課程では、同質サンプリング法、博士課程では理論的サンプリング法であった。また博士課程では、多様なサンプリング法について各々70%以上の者が知識を持っていた。

データ収集方法の知識が90%以上の項目は、3課程ともに非構造化インタビュー、半構造化インタビュー、観察、参与観察であった。実践経験が最も高かった項目は、3課程とも半構造化インタビューであり、いずれも90%弱の者が経験していた。最もその割合が低かったものはエスノグラフィーで、各々の項目の間に大きな差がみられた。

データ解釈方法の知識が最も高かった項目は、3つの課程ともにKJ法、次いでグラウンデッド・セオリーであった。KJ法はほぼ全員、グラウンデッド・セオリーは95%以上の者が知っていた。実践経験が最も高かった項目は、3課程とも質的内容分析、次いでKJ法であった。質的内容分析は約75%の者に、KJ法は約73%に実践経験があった。グラウンデッド・セオリーは、学部、修士では約30%、博士課程では50%の者に実践経験があった。現象学的アプローチでは学部、修士では約20%、博士課程では約30%の者に実践経験があった。調査にご協力頂いた看護系大学教員の方々に深謝いたします。

(本研究の一部は平成15・16年度科学研究費補助金(基盤研究B(2)課題番号15390660)による)。